

映像ソフトに観る《セビーリヤの理髪師》

水谷 彰良

『レコード芸術』（音楽之友社）2011年4月号の拙稿『DVD 発クラシック名作劇場 28 ロッシーニ：歌劇《セビーリヤの理髪師》』に新発売のDVDを加えて改稿し、『ロッシニアーナ』第33号（2012年12月発行）に掲載しました。その書式変更をHPに掲載します。（2013年1月）

出発点としての読み替え演出(①)

ロッシーニ《セビーリヤの理髪師》の原作は、1775年にパリのコメディ・フランセーズで初演されたボーマルシェの散文喜劇『セビーリヤの理髪師、または無益な用心』。ボーマルシェは最初に唄入り芝居（オペラ・コミック）としてこれを書き下ろして上演できず、喜劇用の台本に改作したが、テキストには歌うことを前提にした歌詞があり、上演でも歌の伴奏や劇中音楽をオーケストラが演奏した（モーツァルトもそのロマンスの旋律を主題に、変奏曲を作曲している。K354[299a]）。

最初のオペラ化はドイツ語訳に基づき、ゲオルク・ベンダの息子フリートリヒ・ルートヴィヒ・ベンダが行った（1776年ライプツィヒ）。イタリア・オペラはジョヴァンニ・パイジェッロ作曲《セビーリヤの理髪師》が最初で、1782年にサンクト・ペテルブルクで初演され、成功を収めて広く流布した。ロッシーニのそれは1816年2月20日、ローマのアルジェンティーナ劇場における初演初日で大失敗を喫したが、2日目の公演で成功に転じ、オペラ・ブッフアの最高傑作と認められた。

人気作品ゆえ、《セビーリヤの理髪師》の映像ソフトは映画版も含めて15種ある（下記。2012年5月現在。DVDは本文での言及順に番号を付して掲げ、歌手は、ロジーナ、アルマヴィーヴァ伯爵、フィガロ、バルトロ、バジーリオの順に掲載）。

ここでは分析の出発点として、2002年パリ・オペラ座（バステュー）の上演映像から取り上げよう（①）。最大の特徴は、映画監督でもある演出家コリーヌ・セローが劇の舞台をスペインのセビーリヤからイスラム世界に移した点にある。幕が上がるとそこは砂漠。遊牧民の族長みたいなアルマヴィーヴァ伯爵、街が無いのに〈町の何でも屋〉を歌うフィガロ……見ていて歯痒くなる舞台上で、セビーリヤが8～13世紀までイスラム勢力の支配を受けたという歴史的事実はあっても、劇の時代設定に反するから最後まで違和感を拭えない。

DVD① コリーヌ・セロー（演出）ブルーノ・カンパネッラ指揮パリ・オペラ座管弦楽団&合唱団 ジョイス・ディドナート(Ms) ロベルト・サッカ(T) ダリボール・イエニス(Br) カルロス・ショーソン(B) クリステイン・ジグムントソン(B)他 〈収録:2002年4月パリ〉Denon(国内盤)



歌手は伯爵役のロベルト・サッカを除いて全員ロッシーニ歌唱の水準を満たしているのに、歌の印象が薄い。その原因は、衣装も含めた視覚面が、役柄、劇の設定、歌詞との間に絶えず齟齬をきたすからだ。服に携帯電話を幾つも付けたフィガロがなぜロジーナに手紙を書かせ、飲酒が大罪のイスラム教圏でなぜ伯爵が酔っ払いの兵士に変装してバルトロの屋敷に入るのか？……などと疑問を呈しても仕方ない。すべては演出家による場所の置き換えと小細工に起因する矛盾や錯誤なのである。インパクトあるロジーナを演じるジョイス・ディドナートも、ここでの歌唱がベストとは言えない。伯爵の大アリアも歌われないが、後述するようにその有無は作品解釈や演奏の正否とも係わるだけに問題だ。

演出は重要だけど、歌手の素晴らしい歌と演技があれば、粗末な舞台でも満足できる。有名歌手であってもロッシーニの高度な技巧に適応できなければミスキャストで、伯爵のアリアも在ると無いとでは大違い……それが《セビーリヤの理髪師》なのである。以下こうした視点で、上演史のターニングポイントとなる諸問題も含めて検討してみよう。

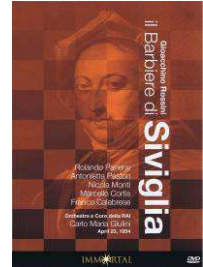
初期の映像に観る20世紀半ばの演奏スタイル(②③)とゼツダ校訂版の誕生(④)

人気作品だけに上演映像は数多い。筆者の知る最も古い《セビーリヤの理髪師》のそれは、1945年制作、1946年2月封切りのオペラ映画で、配役はフェルッチョ・タリアヴィーニの伯爵、ティート・ゴッビのフィガロ、ネリー・コッラーディのロジーナである（Tespri Film制作。マリオ・コスタ監督。約90分の短縮版）。これは敗戦後のイタリアで作られた最初のオペラ映画とあって、大きな反響を呼んだという。3人の主役は32～33歳と若く、タリアヴ

イーニの甘く力強い歌声、ゴッピの若々しく活力に満ちたフィガロが素晴らしいが、残念なことに正規DVDは未発売となっている。

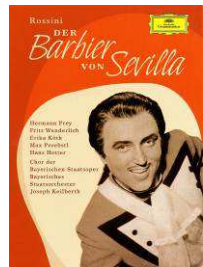
続いて古いのが、1954年にイタリア放送協会 (Radio Televisione Italiana) がテレビ放送用に制作したフィルムで、前記オペラ映画と共に20世紀前半の歌唱のあり方や演技を知る上で貴重なドキュメントとなっている (②、音と映像は別録。最初の放送は1954年4月23日に行われた)。配役はアントニエッタ・パストーリのロジーナ、ニコラ・モンティの伯爵、ロランド・パネライのフィガロで、テレビ用のスタジオ・セットで撮影したため、人物を中心に映像処理が施されている。演出はオーソドックスなものだが、フィガロが登場のカヴァティーナを歌いながら自分のひげを剃るのは珍しい。モンティの甘美な歌声、澁刺としたパネライの歌唱が印象的で、パストーリによるロジーナも19世紀末から続くコロラトゥーラ・ソプラノの伝統を感じさせる。当時の上演の慣例とは異なり、第2幕レッスンの場でロッシーニの原曲がきちんと歌われている点も評価できる。

DVD② フランコ・エンリケ(演出) カルロ・マリーア・ジュリーニ指揮イタリア放送協会管弦楽団&合唱団 アントニエッタ・パストーリ(S) ニコラ・モンティ(T) ロランド・パネライ(Br) マルチェット・コルティス(B) フランコ・カラプレーゼ(B)他 (収録:1954年)Immortal(海外盤)



劇場での収録の最初は、2005年に初DVD化された1959年ミュンヘンのキュヴィリエ劇場におけるバイエルン国立歌劇場のライブで、半世紀前の上演のあり方を教えてくれる (③、ドイツ語歌唱)。キャストがすごい。伯爵は29歳のフリッツ・ヴンダーリヒ、フィガロは30歳のヘルマン・ブライ、ロジーナが人気絶頂のエリカ・ケート、おまけにバジーリオがハンス・ホッターとあって、まさに宝の山だ。その歌唱と演技は20世紀半ばの最高レベルにあり、モノクロ映像&モノラル録音であってもクオリティは高く、舞台としても古臭さを感じさせない。

DVD③ ヘルベルト・リスト(制作) ヨーゼフ・カイルベルト指揮バイエルン国立歌劇場管弦楽団&合唱団 エリカ・ケート(S) フリッツ・ヴンダーリヒ(T) ヘルマン・ブライ(Br) マックス・ブレイブスト(B) ハンス・ホッター(B)他 (収録:1959年ミュンヘン)Deutsche Grammophon(海外盤。ドイツ語歌唱)



ここまではオリジナルを逸脱した楽譜を用い、ロジーナもソプラノ・レジーエロの持ち役とされ、「今の歌声は」も半音高い移調ヴァージョン(へ長調)で歌われる。なにより時代を感じさせるのがコロラトゥーラ・ソプラノによる歌唱で、エリカ・ケートは夜の女王の最高音と同じハイFを連発するだけでなく、歌の稽古の場ではドンゼッティ《ドン・パスクワーレ》ノリーナのカヴァティーナ(騎士はあのまなざしを)を歌うのだ。こうした声種の変更、移調、劇の文脈にそぐわぬアリアの挿入は、1960年代までの演奏の一般的傾向であると同時に、旧時代の指標となっている。

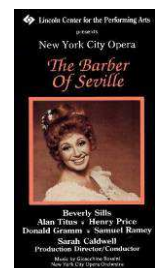
これに対し、新時代の幕を開けたのがアルベルト・ゼッダ校訂版を最初に用いたクラウディオ・アッパード指揮の全曲録音である(1971年DG)。映像では1972年のジャン=ピエール・ポネル演出(④)がこれに当たり、映像と音声は別録ながら、テレサ・ベルガンサの端正で味わい深い歌唱を通じてロジーナの本来の声種がメゾソプラノであると納得させてくれる。伯爵役ルイージ・アルヴァの軽やかな声と滑らかなアジリタも、今日のロッシーニ・テノールの原点に位置する。ポネルの演出も緻密で、ブライのフィガロ、エンツォ・ダーラのパルトロ、パオロ・モンタルソロのバジーリオ、さらにアッパードの指揮も相俟って、新生《セビーリヤの理髪師》にふさわしい名演と言える(但し、伯爵のアリアは歌われない)。

DVD④ ジャン=ピエール・ポネル(演出) クラウディオ・アッパード指揮ミラノ・スカラ座管弦楽団&合唱団 テレサ・ベルガンサ(Ms) ルイージ・アルヴァ(T) ヘルマン・ブライ(Br) エンツォ・ダーラ(Br) パオロ・モンタルソロ(Br)他 (収録:1972年ザルツブルク[映像])DG/ユニバーサル(国内盤)



旧時代の継続(⑤⑥)とバルトリの登場(⑦)

1980年代にはマリリン・ホーンも頻繁にロジーナを歌ったが、世界の主流はなお、声種、解釈、アリアのカットにおいて旧時代のままだった。1976年ニューヨーク・シティ・オペラの上演映像(⑤)がその一例で、ロジーナ役のベヴァリー・シルズは歌の稽古のアリアに続いてフルート独奏を伴う(きらきら星変奏曲)を延々と披露している。これはこれですべて面白いけれど、晩年のロッシーニがアデリーナ・パッティの歌うロジーナのアリアを聴き、「お嬢ちゃん、それは誰の曲？」と皮肉を言ったのを思い出す。マリア・ユイグがロジーナを演じる1981年グライントボーン音楽祭の上演映像も、バルカント復興前のロッシーニ歌手払底の深刻さを物語る(⑥)。



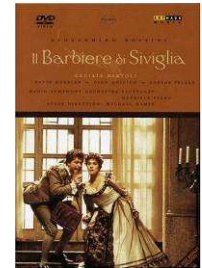
DVD⑤ サラ・コールドウェル(演出)サラ・コールドウェル指揮ニューヨーク・シティ・オペラ管弦楽団、同合唱団
ベヴァリー・シルズ(S) ヘンリー・ブライス(T) アラン・タイタス(Br) ドナルド・グラム(Br) サミュエル・レイミー(B)他〈収録:1976年11月ニューヨーク〉Paramount(VHSビデオ)

DVD⑥ ジョン・コックス(演出)シルヴァン・カンブルラン指揮ロンドン・フィルハーモニック管弦楽団、グランド
ボーン合唱団 マリア・ユーイング(S/Ms) マックス=ルネ・コンソッティ(T) ジョン・ローンズリー(Br)
クラウドディオ・デズデーリ(Br) フェットリッチョ・フルラネット(B)他〈収録:1981年8月グランドボーン〉
[小学館]DVD-V(国内盤)



そんな中、メゾソプラノによるロジーナに新風を吹き込んだのがチェチーリア・バルトリで、1988年シュヴェツィンゲン音楽祭の上演映像は、彼女のまぶしいばかりの初々しさが最大の見どころである(⑦)。とはいえここでのバルトリはまだ22歳。その歌唱は万全とは言い難く、共演者にも恵まれていない。ミヒヤエル・ハンペ演出の舞台は洗練され、装置も美しいけれど、泣き崩れるロジーナの背後で雨を降らせる嵐のシーンを除いて才気に乏しい。

DVD⑦ ミヒヤエル・ハンペ(演出)ガブリエーレ・フェッロ指揮シュトゥットガルト放送交響楽団、ケルン歌劇場合唱団
チェチーリア・バルトリ(Ms) デイヴィッド・キューブラー(T) ジーノ・キリコ(Br) カルロス・フェラー(Br) ロバート・ロイド(B)他〈収録:1988年シュヴェツィンゲン〉[Arthaus]DVD-V(海外盤)



演出面での刷新(⑧⑨)

1990年代の上演映像で目を引くのが、劇作家ダリオ・フォの演出した1992年のネーデルラント歌劇場である(⑧)。序曲の間にコンメディア・デッラルテの人物やダンサー、着ぐるみの動物を登場させ、視覚的な面白さを追及する。持ち上げられた台の上で伯爵が歌い、ロジーナが糸巻きしながらアリアを歌うなど劇と関係のない動きをして煩わしいが、これもフォならではのトンデモ演出と言えよう。アルベルト・ゼッダの指揮、ジェニファー・ラーモアのロジーナ、シモーネ・アライモのバジーリオも秀逸だ。

モダン・テイストの舞台では、グリシャ・アサガロフ演出の2001年チューリヒ歌劇場上演が出色(⑨)。フィガロはサイドカーのオートバイに乗って登場し、ヴェッセリーナ・カサロヴァの超個性的なロジーナに加え、71歳のニコライ・ギャウロフのバジーリオも見ものである(さすがに声は衰えているが)。

DVD⑧ ダリオ・フォ(演出)アルベルト・ゼッダ指揮ネーデルラント室内管弦楽団、ネーデルラント歌劇場合唱団
ジェニファー・ラーモア(Ms) リチャード・クロフト(T) デイヴィッド・マリス(Br) レナート・カベッキ(Br)
シモーネ・アライモ(B)他〈収録:1992年アムステルダム〉[世界文化社]DVD-V(国内盤)

DVD⑨ グリシャ・アサガロフ(演出)ネッロ・サンティ指揮チューリヒ歌劇場管弦楽団&合唱団
ヴェッセリーナ・カサロヴァ(Ms) カルロス・ショーソン(T) マヌエル・ランサ(Br) ニコライ・ギャウロフ(B)他
〈収録:2001年4月チューリヒ〉[クリエイティヴ・コア TDBA80280 (2枚組)]DVD-V(国内盤)



しかしながら、ここまで挙げたすべての上演で伯爵のアリア〈もう逆らうのをやめろ〉が歌われない。オリジナルに忠実な校訂版を作成したゼッダ自身も上演の際にカットしたのは解せないが、これはロッシェニ・テノール復興の遅れも一因であろう。ロジーナの適正な声種、正しいエディションの復活だけでなく、伯爵を歌うテノールによっても《セビーリヤの理髪師》の今昔や演奏史の決定的な分岐点が存在するのである。

〈もう逆らうのをやめろ〉と伯爵役の存在感(⑩⑪⑫)

ロッシェニのオペラの醍醐味が卓越した歌唱にあるなら、伯爵のアリアがカットされていいはずがない。そもそもリコルディ社の楽譜に一貫してこのアリアが載っているのだから、歌われて当然なのだ。にもかかわらず、現在もなおこれをカットする上演が主流である。それを歌う卓越したテノールが少ない、というだけではない。「《セビーリヤの理髪師》の主人公は題名役のフィガロで、伯爵はヒロインのロジーナに続く第三のポジション」との先入観や根強い誤解が障害になっているのだ。

〈もう逆らうのをやめろ〉は指揮者エーリヒ・ラインスドルフが1958年に行った全曲録音でも歌われているが(RCA)、これは例外中の例外であり、舞台上演では1980年代にロックウェル・ブレイクの歌唱を通じて広く知られるようになった。ブレイクは、出演契約に「アリアを歌う」との項目を盛り込むことで指揮者や劇場の求めるカットを拒否できたというから呆れる。要するに、歌手の能力と関係なしに、「最後のアリアは無くて当然」「伯爵は主役ではない」との誤解がまかり通っていたのである。日本でも1993年に藤原歌劇団の招聘で初来日したブ

レイクが契約の際に「アリアを歌う」としたおかげで実現し、ダブルキャストの五郎部俊朗もこれを歌う機会を得たのであった。

上演映像による「もう逆らうのをやめろ」も、ブレイクの歌う1989年メトロポリタン歌劇場ライブが最初である(⑩)。レーオ・ヌッチのフィガロ、エンツォ・ダーラのバルトロと役者の揃った上演であるが、ロジーナが大スターのキャスリーン・バトルとあって旧時代のソプラノ・ヴァージョンに伯爵のアリアを追加しただけで終わっている。ラモン・ヴァルガスやブルース・フォードも90年代の上演でこのアリアを歌っているが、主役は伯爵との圧倒的印象を残すことはできなかった。

DVD⑩ ジョン・コックス(演出)ラルフ・ヴァイケルト指揮メトロポリタン歌劇場管弦楽団&合唱団 キャスリーン・バトル(S)ロックウェル・ブレイク(T)レーオ・ヌッチ(Br)エンツォ・ダーラ(Br)フェルツッチョ・フルラネット(B)他〈収録:1989年2月ニューヨーク〉Deutsche Grammophon(2枚組。海外盤)



ここで理解しておきたいのは、台本作者チェザレ・ステルビーニとロッシーニが卓越したテノールのマヌエル・ガルシアを前提に、劇作と音楽の双方で伯爵を主役に据えたという事実である。そのことは、両者の協議で短いフィナーレに先立ち「テノールの大アリア」を設ける決定がなされた事実によっても裏付けられる。短期間の作曲を余儀なくされたロッシーニが伯爵のアリアを書き下ろし、初演時の題名が《アルマヴィーヴァ、または無益な用心》だったのも伯爵が主役であることの証明で、そこに原作劇やパイジェットとは異なるロッシーニ作品の独自性が見て取れるのだ。

それゆえ伯爵役に歌唱と演技の双方で最高のスター歌手を起用して初めて、《セビーリャの理髪師》の真価が明らかになる。アリアを歌えればいいのではない。すべての点でフィガロやロジーナを凌駕してこそ、伯爵は主役の位置を占めることができるのだ。それをなしたのが、現代ベルカント・テノールの最高峰ファン・ディエゴ・フローレスである。

フローレスの出演した《セビーリャの理髪師》の上演映像は二つある。2005年マドリード王立劇場の上演(⑪)では最初の登場から圧倒的存在感を示し、カンツォーネ〈私の名を知りたい〉の深い感情表現と〈もう逆らうのをやめろ〉の技巧的完璧さにおいても他の追随を許さない。共演者のマリア・バーヨ、ピエトロ・スパニョーリ、ブルーノ・プラティコ、ルッジェーロ・ライモンディは素晴らしい歌手で演技も達人だが、フローレスは表情、演技、歌唱のすべてにおいて彼らの上を行く。皮肉なのは、フローレスの相手役を務める女性歌手に若さや容姿でハンディが生じてしまうこと。バーヨもフローレスが伯爵でなければ、ここまでオバサン臭くは見えなだろう。

DVD⑪ エミリオ・サージ(演出)ジャンルイーゼ・ジェルメッティ指揮マドリード王立劇場管弦楽団 マドリード合唱団 マリア・バーヨ(Ms)ファン・ディエゴ・フローレス(T)ピエトロ・スパニョーリ(Br)ブルーノ・プラティコ(Br)ルッジェーロ・ライモンディ(B)他〈収録:2005年1月マドリード〉Decca(2枚組。国内盤)



その点でフローレスとのコンビにぴったりなのが、ジョイス・デイドナートである。2009年ロイヤル・オペラの上演映像(⑫)は、足を骨折した彼女が車椅子のまま出演したハプニングの記録でもあるが、にもかかわらずそれは、優れた歌手は身体が不自由でもここまで歌い演じられることの証明となっている。

DVD⑫ パトリス・コーリエ&モーシェ・ライザー(演出)アントニオ・パッパーノ指揮ロイヤル・オペラ管弦楽団&合唱団 ジョイス・デイドナート(Ms)ファン・ディエゴ・フローレス(T)ピエトロ・スパニョーリ(Br)アレックスサンドロ・コルベツリ(Br)フェルツッチョ・フルラネット(B)他〈収録:2009年7月ロンドン〉Virgin Classics(2枚組。海外盤)



パトリス・コーリエとモーシェ・ライザーの演出は斬新で、遊びすぎの部分もあるけれど、喜劇なら笑いの仕掛けが多くて構わない。とはいえ車椅子の使用で本来の演出とは異なり、色彩や舞台の美しさでも⑪のエミリオ・サージ演出が優り、フローレスの歌唱も同様だ。ちなみにこのロイヤル・オペラ上演では前年成立したシカゴ大学による新たな批判校訂版が使用され、シカゴ・リリック・オペラで行われた同エディションの披露公演でもデイドナートがロジーナを演じている。

その他の上演映像にみる歌手選択の困難(⑬⑭)

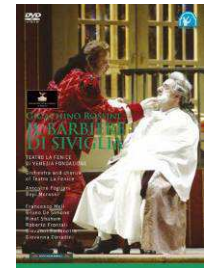
⑪⑫と同時期に収録された二つの上演映像にもふれておこう。

2005年パルマのレージョ劇場の上演映像(⑬)は、最高のフィガロ歌手がいまなおレーオ・ヌッチであることの証明である。聴衆の熱狂的な拍手に応え、〈町の何でも屋〉を即座にアンコールしたのにも驚かされる。ロジーナ役のアンナ・ボニタティスはヴィブラート過多が問題でもテクニックは抜群で、経験豊富な伯爵役ラウル・ヒメネスも安定した歌唱を繰り広げる。バルトロを歌うアルフォンソ・アントニオツィの表情と演技も素晴らしい。演出家ベッペ・デ・トマジによる手の込んだ装飾的文様の背景や装置も含めてフローレスに代表される新たな《セビーリヤの理髪師》とは一線を画し、伝統を受け継いでなお新鮮な舞台が可能であるということが判る。



DVD⑬ ベッペ・デ・トマジ(演出) マウリツィオ・バルバチーニ指揮パルマ・レージョ劇場
管弦楽団&合唱団 アンナ・ボニタティス(Ms) ラウル・ヒメネス(T) レーオ・ヌ
ッチ(Br) アルフォンソ・アントニオツィ(Br) リッカルド・ザネッラート(B)他
〈収録:2005年1月パルマ〉Hardy HCD4023(海外盤)

これに対し、2008年フェニーチェ劇場の上演映像(⑭)は現代におけるミスキャストの見本というべきもので、重めの声のフランチェスコ・メーリはアジリタが滑らかに転がらず、ロジーナ役のリナ・シャハムは本質的にカルメン歌手である。



DVD⑭ ペーピ・モラッシ(演出) アントニーノ・フォリアーニ指揮フェニーチェ歌劇場管弦楽団&合唱団 リナ
シャハム(Ms) フランチェスコ・メーリ(T) ロベルト・フロンターリ(Br) ブルーノ・デ・シモーネ(Br) ジョ
ヴァンニ・フルラネット(B)他 〈収録:2008年5月ヴェネツィア〉Dreamlife(国内盤)

この二つの上演では〈もう逆らうのを止める〉が歌われていないが、これをカットするプロダクションが21世紀にふさわしいとは到底思えない。だが、問題はそこにとどまらない。演出、キャスト、指揮者の解釈に加え、経済的な要因も絡んで現代の上演は複雑な様相を呈しているからだ。新鋭指揮者アンドレア・パッティストーニ率いる2011年パルマ王立歌劇場の最新上演(⑮)はその典型というべきもので、ステファノ・ヴィツィオーリ演出の舞台は絵を描いた背景幕や安普請の家などおおむね経費節約型の作りで、導入曲では衣装をつけたピットの奏者が舞台上がって楽師を務める。抽象と具象の中間的な作りで、うず高く積んだ書籍をバルトロの部屋に持ち出すなど視覚的变化をつけながらも、全体の印象はそっけない。

歌手の所作や動きは緻密に計算され、演劇的にも観客を楽しませようとするけれど、ロジーナを歌うトビリシ生まれのケテヴァン・ケモクリーゼの発声が不安定で、〈今の歌声は〉も音程がすべて微妙にずれている(中低音域の音のぶれは第2幕も同様)。伯爵役ドミトリー・コルチャックも伸び悩みの感があり、アジリタのパッセージは巧みでも母音を開け放つ歌い方がやや下品。フィガロ役のルーカ・サルシがエネルギッシュな歌唱を繰り広げて存在感を示すものの登場のカヴァティーナは声が上ずる。ジョヴァンニ・フルラネット演じる18世紀風のバジリオも面白いが、それにも増して良いのがバルトロを歌うヴェテランのブルーノ・プラティコで、レチタティーヴォとパルランテの表現に個性が際立つ。

24歳のパッティストーニは、管弦楽の統率力はあるものの、歌唱の緩急への即応力が弱い。ロッシーニの才気や陽気さとの相性も必ずしも良いとは言えず、テンポは快調でも音響に即物的で空疎な感触がつきまとう。最後の伯爵のアリアにおける部分的カットも適切な処理とはいえず、基本的にヴェルディ指揮者のタイプであってロッシーニ指揮者ではない。合唱団のレヴェルの低さにも嘖然とさせられる。これに対し、舞台左手前に陣取るレチタティーヴォ・セッコのフォルテピアノ奏者が洒落な音楽を自由に付加し、演技にも関与して楽しませる。



DVD⑮ ステファノ・ヴィツィオーリ(演出) アンドレア・パッティストーニ指揮パルマ王立劇場管弦楽団&同合唱団
ケテヴァン・ケモクリーゼ(Ms) ドミトリー・コルチャック(T) ルーカ・サルシ(Br) ブルーノ・プラティ
コ(Br) ジョヴァンニ・フルラネット(B)他 〈収録:2011年4月パルマ王立歌劇場〉Arthaus Musik
(BD及びDVD海外盤、日本語字幕付き)

こうして種々の映像を観てあらためて思うのは、喜劇としての楽しさ、声楽面の満足、演出家の創意を高いレヴェルで統合することの難しさである。歌と演技に達人な歌手を端役に至るまで完璧に揃えるのも困難だから、隅から隅まで「最高!」と断言できる《セビーリヤの理髪師》の上演映像は、残念ながらまだ存在していない。